災害エスノグラフィー演習　体験談

Ｂさんのケース

【基本情報】

年　　齢：69歳

居住地区：岡山県倉敷市真備地区

家族構成：奥様と二人暮らし

避難行動：立ち退き避難（岡田小学校から小学校へ）

自宅被害：全壊

住所地のハザードマップ上の危険：洪水による浸水５ｍ程度

避難行動要支援者の該当の有無：なし

7/5 18:30　岡山地方気象台が【大雨警報】を倉敷市に発表

7/5 19:40　岡山地方気象台が【洪水警報】を倉敷市に発表

私は、こんなに大きな災害が起きるとは思ってなかった。

雨は、前日の6日（金）ぐらいから降っていましたけれども、強くなったり弱くなったりということで、こんなに大きな災害になるような大雨だった記憶があまりないんですよ。6日も昼間は親戚の所に行ったりして、雨が小ぶりになったり止んだり、また強くなったりと、そういう状況でした。

6日の夕方に会合がありまして、家（地区）から倉敷市内に、夕方の5時ぐらいから出てたんですよ。大雨警報が出ていましたが、あまりたいしたことないだろうということで。その頃はまだ川も川も、そんなに水量は上がっていませんでした。通常の雨よりちょっと大雨、台風とかそういうときが来たときに水位が上がるぐらいで、そんなに心配していなかったんです。倉敷市に行くとき、川の横も通るのですが、あそこの河川敷もぜんぜん浸かっていなくて、まあ大丈夫だということで。会合に行ったんですよ。

それで、帰ってくるときに、8時半過ぎぐらいに倉敷を出て、川を見たら河川敷の所まで水が来ていましたので、夕方に比べたら増えてきたなと言う状況で。災害がないときでも、時々そこは浸かりますので。ですから、通常の雨が少し、大雨が降ったり台風が来たりしたときに浸かる程度の水位だったので、そんなに危険性というのはあまり感じていませんでした。

家に帰ったのが夜の9時ぐらい。その頃はかなり水位が上がっていました。川も川も。家に帰りましてから、200メートルぐらい先に堤防があるのですが、その堤防に上がりまして、水の状況を確認に行ったんですね。夕方行くときよりも川も含めて水位が上がって来ていましたので、どこまで上がっているのかというのを確認するため、堤防まで見に行きました。本当に危険を感じるのか感じないのかということを目で確認しておこうと思いましてね。

川の水位を見たら、これはだいぶん上がっているなという、そこで初めてこのまま上がってきたら越水とか、氾濫とか、そういうこともありうるのかな、と少し感じました。だけど、これはすぐに逃げないといけないというところまではまだいかなかったです。その時点では。

そのあと、やっぱり、ひょっとしたらという川が氾濫するかもという話があったものですから、これは逃げる準備をしておいたほうが良いなと判断したわけです。

昭和51年の台風の時に川の堤防が崩れるのではないかということがあったんですよ。結局崩れなかったんですけれども、崩れるのではないかと大分心配したことがあったんです。そういうことがあったものですから、大雨の時には川よりもどちらかというと川の方を心配して。近所の人でも、川に近いような人は、土手の堤防に上がって川の水の状況はずっと見ているんですよね。今回も堤防に近い人は、堤防に上がって水位を見ている人が結構何人もいたんです。

地区は用水路もあり、その用水路は川のほうに流れているわけですけれど、川が増水しますとあふれてきてしまうので、せき止めて排水所のポンプで強制的に排出する排水機場があります。ちょうどその時、排水機場を運転している友達と会いまして、排水ポンプの能力をいっぱい上げてもなかなか捌ききれないと。「溜水のほうが多いから能力不足で、このまま雨が降り続いたら、ひょっとしてＢさんのところの団地が浸かるかもしれないよ」と言われたんです。今から42年前、昭和51年の台風のとき、排水機場ができる前ですが、床下の浸水をした経験がありまして、そういう情報を聞いたものですから、下手をすると、また床下、あるいは床上まで浸かるかもしれないなと思いまして、避難準備をしておいたほうが良いなと思いました。

だけど、本心では、そこまではあまり心配しなかった。いつもあることだなと思って。とりあえず逃げとったら明日は帰れるだろうというつもりで逃げたんです。川の決壊とか、そういうところまでは全く考えていませんでした。念の為に逃げておこうと、そういう感じでしたね。

夜の９時半頃、家に帰って、隣近所に「こういう状況なので避難準備をしておきましょうよ」と声をかけて回りました。8軒か9軒ぐらいの小さな団地なのですが、日頃から見守り活動をしている3人の高齢者がおりまして、その人達の中で２人は災害時に何らかの支援が必要という方でしたので、その人達に早く知らせなければいけないと思って。また、その人達だけではなく、隣近所に住んでいる若い世帯もそういう経験が無いものですから、そういう情報を伝えてまわりました。

皆さん半信半疑で、「そうなんですか？」という感じだったのですが、一応「わかりました」と言ってくれました。高齢者の１人は、「2階に上がっておくから良いよ。大丈夫だろう」と、返事をされたのですが、１人で残しておくわけにはいかないから、「一緒に逃げましょう」と声をかけました。

若い人たちもすぐに避難してくれました。「そうなんですか」と、最初はそんなに危険な状況なのかなと半信半疑の人もおりましたけど、「わかりました」ということで避難の準備を始めてくれました。若い人たちには「前に浸かったことがあるので」ということで声がけをしました。

団地に住んでいる人で、私以外の人は、私の家が浸かった後に家を建てた人ばかりだったので、そういう経験が無いんですよ。ですから、まさかそんなことがあるというふうには思っていなかったと思いますね。

今思えば悔やまれるのは、私が声をかけた範囲というのが、私が担当している町内会の人だけに声をかけたこと。他の地区には私はその情報を流さなかった。後々考えてみますと、川の決壊まで、結果的に振り返ってみますと、私が隣近所に声をかけたのが夜の9時半頃、浸水が始まったのが０時30分頃なので、その間、2時間半か3時間ぐらいの時間的な余裕はあったわけです。もしも、あの時、低地に住んでいる隣の地区の人にも、ひょっとしたら、そちらにも水が行くかもわからないよ、避難準備したほうが良いよと伝えることができたら。私から連絡することができなかった。その時は、自分の行動だけしか頭の中によぎらなかった。後で考えたら、死者が出た地区にもこんな状況だから、私たちは避難準備をしているよというような話を流していればもっと良かったのかなと思います。

ですから、今後の地域課題としては小さな町内会単位の助け合いも一番大切ですが、必要な情報を地域全体で共有するという、それもまた大切なことなんですね。その辺の体制づくりをこれから進めて行かなければならないと、今、痛切に感じています。

ですが、要支援者の方に声をかけたこと、高齢者の親戚にも電話をして助けていただいたことは、良かったなと感じます。災害があった後、皆さんと顔を合わせて、「お互いに無事で良かったね」という話の中で、「あの時、Ｂさんから声をかけられなかったら私達は何も思わずに寝ていました」と言われたんですよ。「命拾いしました」という一言で、声をかけて良かったなとつくづく感じましたね。何か危険を感じた人は、隣近所を含めて情報を伝えないと何も気が付かない人もいるし、放送があったとしても耳が遠くて聞こえない人もいますし。声がけの大切さ。それと、声をかけられたら素直に聞くという、そういう人間関係、コミュニティの大切さというのをつくづく実感しました。

地区では、まちづくり協議会（自治会のようなもの）の主導で、小地域ケア会議という会議を作っていまして、高齢者とか障害を持っている人達を平素から見守りをしたり、困っていることがあったら支え合うという活動をしましょうということを、平成26年ぐらいからやっていたんです。私も、地区の中で3人の高齢者の見守り活動をしていたわけですが、そういう小地域ケア会議の活動で、日頃の見守り支え合いの活動と、災害時に援護が必要な人の援護をしましょうと言う災害時の対応という2本の活動の柱を立てて活動していたんです。

まずは手っ取り早い日頃の見守り活動から始めようということで、やっていたんですね。災害時の対応については、今からそれを具体的に体制作りをしてやっていこうかということで、平成29年に1回勉強会をやって、去年、平成30年の4月の会議のときに、今度は災害時の対応について具体的に地域で進めて行きましょう、したがって各小さな町内会ごとに自分たちの町内会に要援護者は誰がいるのか、いざというときには誰が誰をどういうふうに支援したら良いのかというのを、各地区で話し合ってくれませんかと。そういうのができたら皆さんがすぐに避難できるようになるからということで、そういう要請を小地域ケア会議の中で、4月にしたばっかりだったんです。そのため、各地区もまだ話し合いはほとんどできていない段階で今回の災害にあってしまいました。

あと1年早くやっていたら。地区でも4人の高齢者の方が亡くなりましたので、そういうことも、ひょっとしたら防げたのではないかなという思いはあります。どこに要支援者の方がいらっしゃるかというのは、把握していましたし、地域でそれを共有もしていました。日頃からの活動では皆さん仲良くしていますのでね。私が声をかけても素直に皆さん受け入れてくれました。

ただ、私も、地区の端から端まで要支援者がどこにいるかということまでを把握しているか？というとそうではないです。やはり、小さな集落単位の付き合いが一番濃いので。自分達の30軒なら30軒の町内会ではどういうお年寄りがいるかということは知っています。ただ、別の地区の人を知っているかといえば、知っている人もいるし知らない人もいます。小さな集落単位というのを大事にしていこうと。それで、共通するところは地区間で連絡を取り合うようにしています。やはり向こう三軒両隣が一番大事ですので。あまり大きな組織として動かすのは難しいので、小さな組織の方が小回りもききますし、顔も見えますので。

22:00 倉敷市が【避難勧告】発令 真備地区全域（洪水警戒）

夜10時過ぎには、避難勧告（洪水警戒）の発表を知らせる広報車が通って来ました。これはやっぱり避難したほうが良いなという判断をしまして、もう一度、隣近所の皆さんに、「避難勧告が出たから避難しましょう。避難先は3つの小学校が指定避難所になっているから、自分が知っている一番良いところに避難してください」という声かけをしまして、皆さんに避難していただきました。

あとで自宅を見に行ったら、決壊箇所が自宅のすぐ近くだったので、うちのブロック塀も傾いていました。決壊したとき、消防の人が警戒のために巡回しようとしていたらしいのですが、「津波が押し寄せてくるような感じで水が向こうから流れてきたのでびっくりして慌てて引き返した」と言っていました。水は相当な勢いで来てます。道路側も決壊していますし、倉庫なんかもものすごく流されていますし。避難が遅れていたら、危なかった。

立ち退き避難を選択したのは、氾濫を想定したからです。もしかすると、床下か床上くらいまで水が来るかなと。それでも二階まで来るというのは考えなかったです。一旦床上まで来ますと、外を出歩くことはできませんし、台所も浸かりますし、トイレも使えない、風呂にも入れない、電気も使えない、結局孤立して何もできないんですよ。非常に不便なんですよね。ですから、より安全な所に避難したほうが良いと思って。もし閉じ込められたらどうしようもないですし、特に台所も風呂もトイレも1階にありますので、1階が浸かったらそういうものが使えませんしね。まず水が引くまでは困りますので。それで避難した方が良いという判断をしました。

避難する際に、要支援者の方に声をかけましたが、一人の方は、息子が高台にいるから息子に来てもらって、息子の所に行きますと。一人は残ると言ったけれども、「私と一緒に逃げましょう」といいました。もう夜だったものですから、私と一緒に行こうということで車に乗せていったんです。玄関まで迎えに行って、一緒に乗ってもらいました。いつも車で送り迎えをしているわけではないですが、数年前の避難のときにも「よかったら一緒に行きませんか」と言ったら、「お願いします」と言うから、「一緒に行こう」と。もう、思いつきというか、念のために声がけをしました。

それからもうひとりの90歳のおばあさんにつきましては、緊急連絡先の親戚の方に電話をしまして、「避難準備をしているけれども迎えに来てくれませんか？だめだったら私が一緒に連れて行きますよ」というお願いをしました。すると「わかりました。すぐに迎えに行きます」ということでしたので、親戚の方に託しました。

災害のときは、支援を受ける人も、遠慮をしないで「頼むね」という意識になってもらわないといけないんですよ。ついつい「私は身体が不自由で動けないから皆に迷惑かけるから避難しなくてもいいや」とか、「避難所に行ってもかえって皆に迷惑かけるから家に残るわ」とか、それで亡くなられた方もいるわけですよ。ですから、「そんなこと言わないで、一緒に逃げようね」という支援者はそう言って、支援される人は「頼むね」って「こんな身体だけどよろしくね」と言えるぐらいの人間関係を、日頃からつくっておかないといけないので、そういうことを私は皆さんに口酸っぱく言っていきたいと思う。皆さんつい遠慮するんです。他にも、避難所に行っても下の世話をしないといけない高齢者を抱えている家族というのは、そんな人前で恥ずかしい姿を見せられないからと2階にいて避難しないという人がいたという話も聞いています。本当に困っている重症な人は、直接福祉避難所にあなたはここに行ってくださいと申し合わせしておいた方が良いと、行政の方も動いています。そういう弱者支援を行政も含めて公助共助でやっていかないといけない。

小地域ケア会議などの見守り活動をすることで、月に一回位しか行きませんが、定期的に行って、「元気にしていますか？最近身体の調子はどうですか？困っていることはありませんか？」とかそんな話をしに行くと、自然に顔見知りになりますし、「今日は病院に行ってきたのよ」とか「最近ここが痛くてね」とかいう話が自然にできるようになってくるんですよ。忙しくて一回飛ばしたことがあって、次に行ったら「しばらく見えなかったけれど、あなたお元気でしたか？」と逆に心配していただいたこともあった。そういう人間関係が自然にできてきますので、そうしますと「なんかあったら言ってね」と言ったときに「お願いします」と言ってくれるようになります。やはり、顔を合わせて話をするというのが自然に人間関係を作るきっかけになるんだなと思いました。

そういうわけで、私は妻と高齢者の方と、10時半過ぎに避難を開始しました。

22:40　岡山地方気象台が【特別警報（大雨）】を倉敷市に発表

避難先は家から4～５キロ程の距離にある土地勘のある岡田小学校に最初に向かいました。学校に着いたら、もういっぱいで入れないので、小学校にまわってくれと言われて、ぐるっと回って、小学校に避難をしました。着いたのが11時半ぐらいでした。数キロしか離れていないので、まっすぐ行けば10分か15分で着くのですが、迂回したことや避難する車で渋滞していたので1時間もかかりました。

最初に岡田小学校に行ったのは、近所の人と、「どこに行く？」と言ったら、私より少し上の人が、「岡田小学校に行きます」と言ったので、私も一緒に行こうかということで。道も知ってたから。川を横切って橋を渡っていくわけですけれども、まだその当時そんなに危険性を感じていませんし、道路も浸かっていませんから。

それで、15分程度で岡田小学校の近くまでは行けたのですが、あと1キロ程度のところで渋滞していて、だいぶ時間がかかってやっと着いたんですけど、そこがいっぱいで。それで小学校にということで回って行ったんですけど。途中だいぶん渋滞しました。夜の11時以降ですね。道路が渋滞していてなかなかたどり着けませんでした。

ようやく小学校についた時には、11時半になっていました。約1時間かかりました。

小学校に向かったのは、指定避難所になっていますし、岡田がだめだったらに回ってくれということで、に行くしかなかったんです。ただ、その道はあまり通ったことが無くて。普段通らないので、どの道を通ったら小学校に行けるのかと迷いながら。途中、道がわからないので、ちょっと横に止めて、後ろの車がどんどん行った後をついていきました。小学校まで人の車の後ろについていって。大きな通りに出ればわかるのですが、畑道とか農道のようなところをまわりながら行ったので、そういう道は普段通りませんので、どの道を通ったら大きな道に行くのかというのが、夜でしたし、わかりませんでした。

23:45【避難指示（緊急）】発令　川南側の真備地区（洪水警戒）

結果的には早めに避難して良かったとは思うのですが、私自身も「明日は帰れるわ」という位のつもりで、とりあえず浸かったら不便さを感じるからまず避難しておこうかなという気持ちの方が大きかったんですよ。2階まで来て家までやられるところまでは想像していなかったのですが、念のため。これまでも台風の時は、女房の実家が高台にあるものですから、とりあえずそこに逃げておこうかということで、隣の高齢者とその隣の高齢のご夫婦を誘って、女房の実家に一時避難はしたことがあるんですよ、台風シーズンに何回かは。避難所ではなくて。土砂災害の心配もあったけど、今まで土砂災害はなかったので、とりあえず水害の方が心配だからって。大雨が降るなど心配な時は、避難勧告は出ないですが、避難準備情報まではちょくちょく台風の時などには出たりしますので、そういう情報がでた時には一時的に家内の実家に避難したことが何回かはあるので。

以　　　上